責任の大きさが自分を強くする

医療ソーシャルワーカーという仕事に就いて

一般社団法人三次地区医師会
三次地区医療センター地域連携・医療相談室
餅川 亜耶さん
MOCHIKAWA Aya

もちかわ・あや
07年3月広島国際大医療福祉学部医療福祉学科卒。同年4月一般社団法人三次地区医師会三次地区医療センターへ入職。在学中はボランティア部に所属し、餅川さんがお世話した方から、学長宛に礼状が届いたというエピソードを持つ。広島県出身。29歳。

“霧の町”と称される広島県三次市で地域福祉に携わる餅川亜耶さん。高校時代、重度障がい者施設で障がいのある人たちと交流したことをきっかけに福祉の道へと進みました。三次地区では高齢化、山間部の過疎化が進み、医師不足である現実から、医療ソーシャルワーカー(MSW)としての責任の大きさを日々痛感すると同時に、やりがいも感じているといいます。はじけるような笑顔で答えてくれた餅川さんに、大学時代の出会いや今の仕事のやりがい、後輩へのメッセージなどを聞きました。

恩師の問い掛けから考えることの意味を知る

子どものころは動物か福祉に関わる仕事がしたかったという餅川さん。高校の職場体験学習で重度障がい者施設を訪れ、障がいのある人たちと触れ合ったことが進路を考えるきっかけとなりました。

「その時は何かしたくても、何もできない自分に無力感を感じました。でも、できないなりに関わろうとした私に障がい者の方が『ありがとう』と言葉をかけてくれたとき、自然と涙がこぼれたんです」。自分にも何かできるはずだと強い思いがわき、福祉を学ぼうという意志が芽生えたといいます。社会福祉士と精神保健福祉士の資格取得を目標に定め、これができる広島国際大に進学しました。

最初のうちは授業と実際の社会福祉士の仕事との関連がよく分かりませんでしたが、実習に参加してからイメージできるようになったそうです。体感することで、MSWの基本的な役割や考え方が理解できるようになりました。

在学中、最も大きな影響を受けたのは吉川眞先生でした。卒研は真砂照美先生の研究室配属でしたが、「吉川先生のところにうかがっては、今の仕事につながる“教え”を受けていました。先生は私の考えを見透かしていたのか、『なぜそう思うのか』『なぜそう感じたのか』などの質問を繰り返し、私自身が考え、答えを出す訓練をされていたように思います」と振り返ります。

よく泣きながら部屋を後にしたことも、今では良い思い出です。「福祉に関わることは簡単なことではない。いろいろな人の存在や思いを社会的につなぎ合わせるための知識や経験を持つ必要があり、その努力を続ける覚悟がいる」。吉川先生はそのことを伝えようとしていたのかもれないと感じています。餅川さんには、吉川先生が大阪でソーシャルワーカーを務めていたことを知り、同じ道を目指すものとして話を聞いておかなくてはいけないという思いがありました。そんな自身を受け入れてくれた吉川先生にも、見守ってくれた真砂先生にも感謝していると話します。

不安を抱える患者さんや家族をサポート

卒業後、三次地区医療センターに就職しました。同センターは一般内科・医療療養型・回復期リハビリテーション病棟を備え、地域の医療機関と連携して、かかりつけ医から紹介された患者さんを診療する紹介型の病院です。地域連携・医療相談室には4人が配属されており、MSWは病棟での退院支援を中心に患者さんへの支援を行います。

三次市は広島県北部、中国地方の中心部に位置し、隣接する庄原市とともに、備北地方と呼ばれています。江の川や馬洗川などが交わる盆地を中心とした地域で、地元では霧の町とも呼ばれています。人口は約5万6千人。広島駅から芸備線の普通電車で約2時間。落ち着いた雰囲気の町並みです。しかし、高齢化の進行に加えて、医師不足も深刻であり、80代前半ではまだ若いといわれるほど。県境の島根県の中山間地域も医師不足という地域事情により、島根県から通ってくる患者さんもいます。そんな中でMSWの役割も増しているのです。

「就職当時はなぜこんなに困っている人が多いのだろうと不思議に思いつつ、自分の経験不足や勉強不足を痛感して情けない思いを抱いていました。でも、3カ月の研修期間を終えると、新人も1人で仕事にかからなくてはいけません。MSWとして何ができるのかと自問自答する毎日でした」

MSWというのは、患者さんや家族が抱える心理的、社会的な問題を解決するために福祉の観点からサポートし、社会復帰の促進を図る専門職です。例えば家庭状況に応じて、医療費減免の手続き方法を伝えて、自治体の医療費助成などの情報を提供。患者さんとの信頼関係の構築、地域社会との密接なかかわりが重要になります。餅川さんの場合、このセンターが患者さん各家庭と地域の中間にあり、その間をつなぐという業務が自身の希望に近かったこともあり、頑張れたといいます。MSWは日本では比較的新しい仕事ですが、診療報酬改訂で退院調整加算が始まり、そこに社会福祉士が明記されたことにより注目されるようになりました。

「病院にはさまざまな問題を抱えて入退院を繰り返す方も多いので、生活問題の整理をはじめ、地域からの情報収集が欠かせないですね。患者さんやその家族にきちんと理解してもらえる対応を心掛けています」

異なる境遇を生きてきた人は考え方が千差万別で、感情表現の仕方や言葉にも違いがあります。それを聞き取りながら、当事者やその家族の思いに寄り添い、在住地域の医療機関や福祉機関とつないで、退院後の生活を具体化していくことが餅川さんの使命です。業務の遂行には経験の積み重ねや、自分自身の振り返りが大事。「あなたに話してよかった」「もっと早く相談していればよかった」「何か道筋が見えてきた」などの感想や、退院後も元気に生活している話を聞くたび、大きなやりがいを感じています。

「就職後7年の間に高齢化も進み、問題を抱える患者さんが増えてきました。老老介護など、この人が介護をしていたのかと驚くようなケースや、山間部から出てきた独居高齢者が後に認知症を発症するケースもあります。ニュースを見聞きするたび、私たちの責務もいっそう重要になると感じずにはいられません」。現状の社会制度では対応できることに限界があり、医療従事者の努力だけでは解決できない場合があるのも事実。期待される役割が大きくなればなるほど、いかに応えられるのかと試行錯誤しています。

強い思いを大切に

最後に後輩の皆さんへのメッセージを語ってくれました。

「大学は好きでしたね。在学中は先生方に本当にお世話になりました。教員と学生、学生同士、一対一で本音の話ができるところが大学にあると良いですね。私の場合、吉川先生がその場を与えてくださったのだと思います。後輩の皆さんには、現場は厳しいものですから、強い気持ちを持ち続けて仕事ができるよう、その仕事で何がしたいのかをしっかり考えてほしいと思います。就職してからも、その職場で何ができるのかをいつも自問自答して、仕事を続けてほしいですね。頑張ってください」